

## 『舞姫』論争

石橋忍月『国民の友』（明治二三・三）

「舞姫」の意匠は恋愛と功名と両立せざる人生の境遇にして、此境遇は処せしむるに小心なる臆病なる慈悲心ある——勇氣なく独立心に乏しき一個の人物を以つてし、以て此の地位と彼の境遇との關係を發揮したるものなり。——中略——抑も太田なるものは恋愛と功名と両立せざる場合に際して断然恋愛を捨て功名を採るの勇氣あるものなるや。曰く否な。彼は小心的臆病的の人物なり。彼の性質は寧ろ謹直慈悲の傾向あり。理に於て彼は恩愛の情に切なる者あり。「処女たる事」を重すべきものなり。夫れ此「ユングフロイッヒカイト（処女たる事）」は人間界の清潔、温和、美妙を支配する唯一の重宝なり。故に姦雄的権略的の性質を備ふるものにあらざれば之を輕侮し之を棄却せざるなり。

森鷗外「舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書」（『しがらみ草紙』明治二三・四）

処女を敬する心と、不治の精神病に係りし女を其母に委託し、存活の資を残して去る心とは、何故に両立すべからざるか。昔太田がエリスを棄てたるは、エリスが狂する前に在りて、其処女を敬したる昔の心に負きしはここなりといはば、是れ弱性の人の境遇に驅られる状を解せざる言のみ。太田は弱し。其大臣に話したるは事実なれど、彼にして家に帰りし後に人事を省みざる病に罹ることなく、又エリスが狂を發することもあらで相語るをりもありしならば、太田は帰東の念を断ちしも亦知る可らず。彼は此念を断ちて大臣に対して面目を失ひたらば、或は深く慙恙して自殺せしも亦知る可らず。臧獲も亦能く命を捨つ。況や太田生をや。其かくなりゆかざりしは僥倖のみ。此意を推すときは、太田が処女を敬せし心と、其帰東の心とは其両立すべきこと疑ふべからず